

Quality of Life と私の研究  
——Quality of Life の教育学的考察——

学生番号 C0681001

神門 <sup>しのぶ</sup> しのぶ

(総合人間科学研究科 教育学専攻 博士後期課程)

【要 旨】

クオリティ・オブ・ライフ (QOL) には〈生活の質〉と〈生命の質〉という意味があり、用いられる分野によって使い分けられている。教育学に統一された見解はまだないが、QOL について関心を高めていくことは、人間の全体性を重んじる学問としての教育学にも要請される課題である。

そこで、教育学固有の QOL という視点を探る手がかりとして、アウグスティヌスの思想と生涯から人間のライフのあり方を整理した。教育学的な観点から見ると、彼の生涯は、真理探求という究極の目標に向けて精神的に鍛錬を続ける自己教育の営みである。その歩みは困難を伴うが、真に幸福な生活をもたらす。損なわれたり奪われたりするものがない真理が、確実に不滅の幸福につながるからである。キリスト教でいう〈永遠の生命〉が真理と深く関わっていることは示唆的である。

つぎに、テイヤール・ド・シャルダンの幸福論を参照した。彼の定義する幸福な人間とは、高次の状態を目指して活動し続けることの中に喜びを見いだす人をいう。この際、喜びの対象は、滅びたり失われたりするものがないものである。永遠なるものに魅せられて歩み続けた人びとが、人類の進化という流れに一致していることをもって、人間の生活と生命との構造的な関わりという示唆は科学的にも妥当であるとされる。では、自己を成長させていくことが、幸福に通じる人間のライフの本来的なあり方と重なるというこの見方は、どんな意義をもちうるであろうか。

今日、効率性のみで人間の価値を測ろうとする傾向性が、社会的弱者のいのちに対する軽視を招いている。しかし、一個人を超えた人類全体の生命は、非生産的で徒労にも似た苦しい営みによって贖われてきた。評価基準の数値に現われてこない負的な要素の価値が、現在見誤られているのかもしれない。したがって、弱さの価値をただしく含む QOL を提言することが、教育学に求められる役割であると思われる。

## 1. はじめに

Quality of Life (クオリティ・オブ・ライフ) とは何か。この言葉の意味にかんする定まった共通理解はあるのだろうか。1998年発行の広辞苑第五版を見てみると、「クオリティ・オブ・ライフ」は「クオリティ」という見出し語の準見出しとして載っており、その定義は、「生活を物質的な面から量的にとらえるのではなく、個人の生き甲斐や精神的な豊かさを重視して質的に把握しようとする考え方。医療や福祉の分野でいう。生活の質。生命の質。」とある。しかし、1991年の第四版に「クオリティ・オブ・ライフ」という準見出しはないので、改訂の際あらたに加えられたのであろう。つまり、この言葉が日本人の用いるカタカナ語として認知されるようになったのは、ごく最近のことである。

英語ではどうであろうか。言葉のおよその初出時期を知ることのできるオクスフォード・イングリッシュ・ディクショナリーによると、quality/of/life という三つの英単語が英文の中で一つのまとまりとして用いられるようになったのは二十世紀の半ば頃である<sup>1</sup>。この辞典に載っている(the)quality of life の文例は、経済や公害対策といった社会政策にかんする文脈で人びとの生活の水準に言及している用例ばかりなので、少なくともここに集められている用例は、どれも生活の方の質を意味している。また、ある辞典では quality-of-life という形容詞を、affecting the quality of urban life (都会生活の質に影響を及ぼす) と説明している<sup>2</sup>。

おそらく、ある一定の概念をもった語群としての quality of life は、大量消費社会の到来に伴って人間の生活環境が急変し、ともすると量的な指標にばかり人びとの関心が集まるようになった時期に、人間の生活の質的な面に目を向けるため、それを記述したり評価したりするための表現として使われ始めた。それゆえ、この言葉の第一義には生活の質という説明がくるのであろう。たしかに、生活者の意識や社会構造の改善や見直しを図ろうとする環境や福祉の諸分野では、生活の質を左右する条件や指標という意味でクオリティ・オブ・ライフを捉え、一般名詞として用いることが定着しているようにみえる<sup>3</sup>。

## 2. 問題提起としてのクオリティ・オブ・ライフ

では、クオリティ・オブ・ライフ<sup>4</sup>という言葉に生命の質という意味が加わった要因は何

<sup>1</sup> quality of life は、この辞典の見出し語としてではなく、名詞 quality の八番目の意味 (The nature, kind, or character of something) における頻出の語句として掲載されているが、quality of life という言葉自体の定義づけはこの辞典ではなされていない。はじめて the quality of life という用例が出てくるのは 69 年である。その後、72 年、77 年、79 年の用例まで紹介されているが、それらが皆、生命というより生活の質の意味で用いられていることは、各用例の文意から明らかである (*The Oxford English Dictionary vol. XII, second edition, Oxford University Press, Oxford, 1989, p.974.*)。

<sup>2</sup> *Random House Compact Unabridged Dictionary, special second edition, Random House, N. Y., 1996, p.1579.*

<sup>3</sup> たとえば、「生活の質 QOL=quality of life」の項『現代福祉学レキシコン第二版』雄山閣出版、1998 年や、「生活の質 quality of life」の項『世界大百科事典第 15 巻』平凡社、2005 年改訂版など。

<sup>4</sup> 以下、QOL と略記する。

であろうか。古来、人類は人間の生命に対して絶対的な尊厳を認めてきている。人間が一貫してそのような態度を保っていられることの根本には、「殺してはならない」（出エジプト 20・13、申命記 5・17）という不変の掟を説き続けているキリスト教会の大きな働きがある<sup>5</sup>。そこで、従来、生命の絶対的な価値に議論の余地の生じなかった時代や場所においては、ことさら QOL という記号を提示して、その中身について人びとが確かめ合う必要がなかったのであろう。ところが近年、医療技術の著しい進歩が、人間に日常生活から程遠い状態での生存を可能にし、このことが「延命治療の濫用」という問題を生じさせている一方で<sup>6</sup>、これまで道徳上の規範がもっていた客観的な拘束力が、「倫理的相対主義」に特徴づけられる今日の文化によって弱まりつつあるという現実がみられる<sup>7</sup>。その結果、「人間の生命はある質を保持している場合にのみ価値がある」<sup>8</sup>のではないかといった〈生命の質〉倫理が具体化してきた。このような経緯で生命の質をも指すことになった QOL という言葉は、いまでは生命倫理にかかわる諸分野において、いわばその言葉自体が問題提起の場になっている。

教育学の分野でも、現在統一された見解があるわけではない。実際のところ、教育学固有の研究領域には、「経験諸科学や哲学や、そして特殊なし方においては神学が対象とする事柄」<sup>9</sup>が含まれるので、人間の具体的な状況としての〈生活〉と、一般的・本質的な人間観の基盤としての〈生命〉は、研究課題や方法によってはどちらも考察の対象になりうる。とはいえ、教育学という学問が、「教育という極めて多面にわたる、しかし同時に全体としての人間に関連しつつ統一を求められる営みの解明」<sup>10</sup>という目標において一致するものであるならば、人間の QOL について思いを巡らすことは、原理的にみてもきわめて切実に要請されるはずの課題である。そこで本稿では、QOL とは何かについて教育学の立場から考察を行ない、教育学固有の QOL という視点を確認するための一助としたい。

### 3. アウグスティヌスの生涯から引き出される life/vita 観<sup>11</sup>

ここでは、アウグスティヌス（Aurelius Augustinus 354-430）の思想を教育学の基本思想と捉えた上で、彼が考え、また彼自身が歩んだ自己教育のありようを整理することによって、アウグスティヌスにみられる生命(vita)観を明らかにしてみよう。

アウグスティヌスは、人間はどのように生きるべきかという課題を、「われわれはみな、

<sup>5</sup> 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音』裏辻洋二訳、カトリック中央協議会、1996年、112頁。

<sup>6</sup> 「生命の質」の項『岩波哲学・思想事典』岩波書店、2003年、930-931頁参照。

<sup>7</sup> 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音』143頁。

<sup>8</sup> 「生命の質」の項『岩波哲学・思想事典』930頁。

<sup>9</sup> 小林博英『教育の人間学的研究』九州大学出版会、1984年、107頁。

<sup>10</sup> 同書 108頁。

<sup>11</sup> 英語の life はラテン語の vita に相当する。田中秀央編『羅和辞典増訂新版』（研究社、2000年、682頁）によれば、vita の定義は、「1 生命、生涯。2 氣息、精神。3 生活法、生活ぶり、人生の行路、履歴、行状。4 伝記。5 人間界、人類。6 愛人」とある。

たしかに、幸福な生活を送ることを望んでいる」<sup>12</sup>という説明から始める。つまり、生きる(vivere)という人間の営みは、幸福な生活の探求であると表現される。では幸福な生活とはどのようなものであろうか。彼は、「じっさい幸福な生活は真理を喜ぶことなのである (beata quippe vita est gaudium de veritate)」<sup>13</sup>と説明する。この喜びは、他の何ものでもなく真理によって得られる喜びであるから<sup>14</sup>、真理それ自体を求める活動を通じて、その活動によって、その活動の中に現われてくる。すなわち、幸福な生活は、真理への接近という知的な活動と深い関係がある。事実、アウグスティヌス自身にとって真理への問いとは、世界観や人生観の獲得だけではなく、人格形成とその発展の可能性を意味するものでもあった<sup>15</sup>。したがって、アウグスティヌスの教育論にあつては、こうした人間の幸福な生き方の本質を知ることが教育を理解する時の基本的な条件であると考えられている<sup>16</sup>。

それでは、探究の対象となる真理とは、明確に探し出して手に取ることのできるものであろうか。アウグスティヌスが、「真理を完全に所有することは、来世において希望していた」<sup>17</sup>ことからわかるとおり、真理の探究という知的活動は目的であると同時に過程である。アウグスティヌスの思想—すなわちカトリックの教え—において神と同義でもある真理は、いうまでもなく手に触れて感覚しうる対象ではない。したがって、真理の探究とは真理に一步ずつ近づいていくことにほかならず、教育の究極の目的でもあるそのような生き方が、そのまま人間の幸福な生き方に通じるものと考えられているのである。しかし、そのような幸福は、安穏で快適な暮らしといった発想からは遠く隔たっている。たとえば、「持つことのできないものを求める人」や「求めるべきでないものを持っている人」、あるいは「持っていてしかるべきものを求めない人」を幸福な人とは呼べないといわれていることからわかるとおり<sup>18</sup>、幸福な生を送るためには、何に向かって近づいていくべきかを判断する正確な選択眼が欠かせない。そのような眼を培う過程がけっして安楽な道のみであることはなく、ゆえに、生涯を通じて自分自身の精神を鍛錬していくことが求められる。さらに、ここで人間が取り組まなければならないとされる課題は、物質的なものから非物質的なものへ、また、感覚による理解から思惟による理解へと、自己を方向づけるこ

<sup>12</sup>アウグスティヌス『カトリック教会の道徳』熊谷賢二訳、創文社、1993年、23頁。

<sup>13</sup> 聖アウグスティヌス『告白(下)』10:23:33、岩波書店、2005年、45頁。St. Augustin, *Les Confessions*, Œuvres de St. Augustin 14, Desclée, Bruges, 1962, p.200.

<sup>14</sup> 「このように悲惨でありながら、人間の心は虚偽なものよりも真実なものを喜ぼうと欲する。それゆえ魂はなにものにも乱されることなしにただ真理によって、すべての真理の根源である真理そのものによって喜びを得るとき、はじめて幸福となるであろう」(聖アウグスティヌス『告白(下)』10:23:34、47頁)。

<sup>15</sup> ヘッセン『アウグスティヌスの哲学』松田禎二訳、行路社、1988年、19頁。

<sup>16</sup> Howie, *Educational Theory and Practice in St. Augustine*, Teachers College Press, New York, 1969, p.41.

<sup>17</sup> ネメシェギ「注26」アウグスティヌス『教えの手ほどき』熊谷賢二訳、創文社、1993年、136頁。

<sup>18</sup> なぜなら、そのような人びとはそれぞれ、苦悶する人、誤っている人、健全でない人だからである。アウグスティヌス『カトリック教会の道徳』23-24頁。

とにある<sup>19</sup>。これがどれほど忍耐を要する困難な課題であるかということは、肉的なものを求める意志と霊的なものを求める二つの意志が「たがいに争いあってその闘争によってわたしの魂を引きさいた」<sup>20</sup>とのアウグスティヌスの回顧から容易に察せられる。学びを刺激づけるものは真理を渴望する愛であり、学びが継続し、深まっていくのもこの愛によるが<sup>21</sup>、なぜ人間は、アウグスティヌスのように心の分裂状態に苦しんでまでも、なお真理に近づくことを希望するのであろうか。

幸福に生きるために目指される真理—アウグスティヌスが神の知識とも呼ぶもの—は、自分のもとから奪い去られる可能性のあるものであってはならない。なぜなら、「失うかもしれないという大きな恐れをいだいている以上、幸福とはいえない」<sup>22</sup>からである。それゆえ、探究の対象はおのずと永遠で不変なものに限定されることになり、そこから、真理の認識とは人間にとって「永遠の生命」<sup>23</sup>を意味することが導かれる。アウグスティヌスは、不朽・不変の神性を確実に味わうための方法を模索しながら、「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ 14:6) という聖句を思い起こすのである<sup>24</sup>。

以上、自己教育という形で表わされるアウグスティヌスのライフを取り出してみた。彼の生涯は、幸福と言明される人間の生活が、究極的に、何ものによっても取り上げられることのない確実な永遠の生命を志向して営まれるものであることを示している。つまり、彼の QOL は人間の生活と生命との構造的な関わりを示唆するものであり、ここに人間のライフの本質が明かされている。

それでは、われわれはこの説明から、今日何を汲み取り、それをどう生かしていけばよいのであろうか。つまり、現実のわれわれにとって、〈永遠の生命〉につながる幸福とは何であるのかという素朴な問いが生じてくる。

#### 4. テイヤール・ド・シャルダンの見解を手がかりに

そこで、テイヤール・ド・シャルダン(Pierre Teilhard de Chardin 1881-1955)の幸福論との共通点を手がかりに考えていくことにしよう。テイヤールは「幸福についての省察」と題された講演の中で、「人間の幸福に通じる最良の道」というものの定義を試みている<sup>25</sup>。それによれば、人間の実際的な行動をもとにして考えた場合、そこには三通りの根本的な姿勢がみられ、人類はいつでもこの三つの類型に分類されるのだという。第一は「疲れた人たち」と呼ばれる悲観論的な傾向をもつ人びとで、彼らは努力や煩わしさをなるべく避

<sup>19</sup> 聖アウグスティヌス『告白(上)』7:17:23、服部英次郎訳、岩波書店、2004年、233頁。Howie, op. cit., p.41.

<sup>20</sup> 聖アウグスティヌス『告白(上)』8:5:10、258頁。

<sup>21</sup> Howie, op. cit., pp.54-55 参照。

<sup>22</sup> アウグスティヌス『カトリック教会の道徳』25頁。

<sup>23</sup> 同書 80頁。

<sup>24</sup> 聖アウグスティヌス『告白(上)』7:18:24、234頁。

<sup>25</sup> テイヤール・ド・シャルダン『愛について』山崎庸一郎訳、みすず書房、1974年、7頁以下。

け、要求を制限しようとする<sup>26</sup>。第二は「陽気な人たち」と呼ばれる享樂的な人びとで、彼らにとって「生きることは、行動することではなくて、現在の瞬間によって自己を満たすこと」<sup>27</sup>である。第三は「熱心な人たち」と呼ばれ、視点をつねに未来に向けており、愚直で気詰まりな面を持ち合わせてはいるが、「生きることが登攀であり発見であるような人たち」<sup>28</sup>のことを指している。

テイヤールは、この「熱心な人たち」に見いだされる幸福を「成長の幸福」<sup>29</sup>と名づけている。というのも、彼らが何かの事物を追い求めるのではなく、行動することによって、行動することの中に喜びや幸福を感じる人びとだからである。これに対して、第一の類型には「平穩の幸福」が、また第二の類型には「快樂の幸福」がそれぞれ見いだされるものの、テイヤールは、「物理学と生物学との最近の成果」<sup>30</sup>である人類の進化という現象からみて、第三の類型にみられる幸福が「真の意味でわれわれに幸福をもたらしうる唯一のもの」であることは明らかであると断言する。未来に向けて何かを発見しながら成長し、そのような愚直な生き方そのもののうちに喜びを見いだす人びとの活動というのは、宇宙の生命現象が不可逆的に進展してきた運動と一体の流れにあるからである。そして、彼らの歩みには、自己を把握し、他者を愛し、大いなる存在に自己の生命を帰属させるという諸段階、すなわち人間の人格化の過程を含むものであるとテイヤールは述べる<sup>31</sup>。彼らの喜びの源は「汲めども尽きざるもの」<sup>32</sup>に見いだされるため、必然的に、成長の幸福は「死と腐敗のいっさいの脅威」とは無縁の永遠性に包まれている。

このように、テイヤールが論じる「熱心な人たち」の生き方に見られる成長の幸福と、アウグスティヌスの生涯が示している真理探究という形に表出してくる幸福とは、人間の同じ行為によって生み出されるものであると思われる。両者の説明は、人間の幸福が、永遠という属性を志向するものであることと学び続ける姿勢を要請するものであるという点で共通している。つまり、教育学的関心に沿って QOL を洗い出していくと、人間のライフの本来のあり方は人間の自己教育的な歩みであると見なすことができる。それゆえ、これを、人間のいわば原初的な QOL の一つの要素であると考えることができよう。では、かりにこの見方が教育学的な QOL であるとすれば、そこにはどのような意義が見いだされるであろうか。

## 5. むすび——弱さの価値を含意するクオリティ・オブ・ライフの提言

今日われわれの周囲には、一方では人間一個人の価値と尊厳を認める感受性が成熟し、

<sup>26</sup> 同書 9-10 頁、13-14 頁。

<sup>27</sup> 同書 11 頁。

<sup>28</sup> 同書 12 頁。

<sup>29</sup> 同書 15 頁。

<sup>30</sup> 同書 16 頁。

<sup>31</sup> 同書 22 頁参照。

<sup>32</sup> 同書 34 頁。

人権をめぐる宣言が種々に提唱されながら、他方では高齢者や困窮者といった弱者や胎児の存在が軽視されていることの間、見過ごすことの許されない矛盾がある<sup>33</sup>。こうした弱者のいのちに対する軽視を引き起こさせる要素として、人間の価値や尊厳を「言葉による明快なコミュニケーション、あるいは少なくとも知覚でとらえることのできるコミュニケーションの能力」<sup>34</sup>で測りがちな傾向がある。いいかえるならば、社会構造を支配している言語的・数値的な評価基準で測ることができないことを、社会的に存在しないと見なしてしまうのである。これは、生産性や効率性による社会への貢献度だけで人間を評価する傾向性のもっとも憂慮すべき弊害であろう。

しかし、本稿で論じてきたとおり、一個人を超えた人類全体のいのちにもかかわる人間の幸福なライフは、生産性や効率性とはまったく無縁に営まれるものである。むしろ、幸福は徒労や嘆息に満ちた非生産的な営みの中に息づいているとさえ感じられてこよう。ここから、「人間らしくこの苦しみと出会うことがより勝れたことなのか」<sup>35</sup>というあらたな問いが浮上する。つまり、苦しみには数量で測れない価値があり、それこそが人間のライフの質をより高めるものであるにもかかわらず、われわれはまだその価値に十分に気づいていないのかもしれない。

そうであるならば、この〈弱さの価値〉をただしく判断できる QOL の視点を確立していくことが、教育学の分野に求められるふさわしい仕事であり、同時に、ライフの全側面への等しい配慮に欠けた現代社会がもっとも待ち望んでいる課題であると考えられる<sup>36</sup>。

<sup>33</sup> 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音』35頁。

<sup>34</sup> 同書37頁。

<sup>35</sup> 小林博英『教育の人間学的研究』28頁。

<sup>36</sup> イエスが弟子たちに与えた使命が福音宣教と病人のいやしであることは、神が人間の霊的いのちと身体的いのちの両方に、ひとしく配慮していることの表われである（教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音』94頁参照）。